The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中井竹山の詩についての覺書
Author(s)	范, 月嬌
Citation	懐徳. 1980, 50, p. 21-47
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90587
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

中井竹山の詩についての覺書

范　月　嬌

はじめに
一　詩　病
(一)　字の重なり
(二)　韻の誤まり
二　模　擬
三　用　字
四　典　故
五　苦吟と佳篇と

はじめに

私は宋代の詩について研究している者であるが、來日以後、宋代の詩が日本に與えた影響の大きいことを知り、非常な興味を覺えた。そこで、さしあたり、宋代の代表的詩人である黄山谷が日本の五山文學とどのような關わりを持ったかということについて檢討し、「黄山谷詩の特色」(『東洋文化』第二十二號・一九七九年)と題して發表した。その後、さらに日本の漢詩文を讀んでいるうちに、江戸時代、大阪に懷德堂という學塾が存在していたことを知り、

そこの代表者であった中井竹山・中井履軒兄弟がすぐれた詩人であることを知った。のみならず、兩人の詩文を讀むうちに、宋明時代の詩に少なからぬ影響を受けていることに氣がついた。

しかし、兩兄弟、とりわけ竹山の詩について論評したものが少ないことを知り、この方面についての研究が未開拓であることを殘念に思った。そこで、竹山の詩について、中國文學を專攻する中國人の眼からみての評價を試みようと思うに至ったのである。

もっとも、懷德堂、ならびに江戸時代後期の諸環境についての私の知識は乏しい。西村時彦氏の『懷德堂考』（懷德記念會・一九二五年）・加地伸行氏ら著『中井竹山・中井履軒』（明德出版社・一九八〇年）に依って、その大體を知り得ただけである。

だから、本來ならば、竹山をめぐる人々との關わりや、同時代において有名な詩社であった混沌社の詩との關係などについて關連づけながら論じるべきであるが、まず最初の階段として、竹山の詩そのものをとりあげ、それについての評價を加えてみたいと思う。そして、以後、稿を改めて竹山詩の內面世界についての研究を行ないたいと思う。

周知のことではあろうが、念のために附言すると、竹山は文化二年（一八〇五年）、七十五歲で沒した。江戸後期における日本最高の儒者の一人であり、反徂徠派の立場に立った朱子學者である。そしてなによりも懷德堂を興隆させた大功績者であることに大きな意味を有している。儒家としてすぐれた業績を殘しているが、文學方面についていえば、『詩律兆』という大部の作詩法書を撰し、漢詩作家に大きく寄與した人物である。

一　詩　病

中井竹山の詩文集である『奠陰集』に收錄されている漢詩は約千四百餘首あり、そのなかにすぐれたものがかなり多いが、缺點のある詩も少なくない。始めにその缺點について、つぎのような二節に分けて述べてみたいと思う。

(一) 字の重なり

古人が詩を作るときには、重ねて字を用いることをさけ、もしやむをえない場合があれば、必ず重字の意味の區別を説明する。すなわち宋の魏慶之がいったとおりである。彼の『詩人玉屑』に『三山老人語錄』を引いて「白樂天の劉夢得に寄する詩に『蚤白、無兒を歎く』の句有り、劉、詩を贈りて曰く、華髪と無兒とを嗟くこと莫れ、却って是れ人間の久遠の期。雪裡の高山、頭の白くなること蚤く、海中の仙果、子の生るること遲し。于公、必ず高門の慶び有り、謝守、何ぞ曉鏡の悲しみを煩はす。幸いに斯くのごとく分、淺きに非ざるを免れ、君に長く夢熊の詩を詠ふを祝ふと。注に云ふ、高山、本高く、于門、之をして高からしめ、二字の意、殊なり、古の詩流、これを曉り、唐人、重疊に字を用ふるを忌むもの、甚だ多し。東坡、一詩に兩字の耳字の韻有り、亦た義同じからずと曰ふ」といっている。竹山の詩に字を用いるとき、重なったところはかなり多く、たとえばつぎのようなものがある。

＊舟下羅干

載酒扁舟下急灘　急灘回轉幾重巒

酒を載するの扁舟、急灘に下り、急灘幾重巒を回轉す。

＊賦花月宜佳人得人字

花前朗月畫樓春　翠袖憑欄欲慘神
過客未言花月好　只窺憐影弄香人

花前の朗月、畫樓の春、翠袖、欄に憑りて神を慘まんと欲す。過ぐる客、未だ花月の好きを言はず、只だ影を憐み香を弄するの人を窺ふのみ。

＊梅月圖

夜梅幽艷月前遮　冬月寒光梅上斜

夜梅の幽艷、月前に遮はれ、冬月の寒光、梅上に斜なり。

＊題（張繼）楓橋夜泊圖

名繼人能繼得無　楓橋一夜探驪珠
無聲詩客毫偏健　功寫啼烏落月圖

名は（張）繼、人能く繼ぎ得るや無や、楓橋の一夜、驪珠を探す。聲無き詩客、毫偏に健、啼烏落月の圖を功寫す。

右に擧げた四首は七言律詩で、記號をつけた如く、重字が多く出て來る。一字を二回用いたほか、また一字を三回も、四回も、さらには八回も用いた場合あり、たとえば「折楊柳用青字」の詩がある。

送君上柳塘　柳色鎖江亭
君去紅亭路　唯餘柳眼青

君の柳塘に上るを送り、柳色、江亭を鎖す。
君、紅亭の路を去り、唯だ柳眼の青きを餘すのみ。

右に擧げた詩は五言絶句であるが、詩中には「柳」字は三回用いられ、「君」、「亭」字は二回用いられている。外に、「別高山仲繩」の詩がある。

今古多奇士　誰儔吾子奇
其奇難猝述　關山忽別離
天下若識奇士面　且誦竹山臨別詩

今古、奇士多く、誰か吾が子の奇に儔ぶ。
其の奇、猝かに述べ難く、關山、忽ち別離す。
天下若し奇士の面を識らば、且らく竹山の臨別詩を誦め。

右に擧げた詩は古詩で、二聯は五言、一聯は七言で、詩中に「奇」字は四回用いられ、「士」、「山」、「別」字は各々二回用いられている。また、たとえば「和答伯遷花下見憶作」の詩に、

雪裡相逢彼一時　兩地春風更相思
濵陰花開君不見　箕陽花落我不知
花開花落春將盡　晴窗空誦寄來詩

雪の裡に相ひ逢ふこと彼の一時、兩地の春風、更に相ひ思ふ。
濵陰の花、開くこと君見ず。箕陽の花、落つること我知らず。
花開き花落ち春將に盡きんとし、晴窗に空しく寄來の詩を誦む。

とある。この詩は七言古詩で、詩中に「花」字は四回用いられ、「相」、「春」、「開」、「落」などは各々二回用いられたものである。また「燕燕雌雄吟」の詩に、

雌雄燕子皀衣齊　雌去雄來各啄泥
雄定巢時待雌宿　雌生卵日喚雄啼
新兒雌哺雄相助　故國雄歸雌不迷

雌雄の燕子、皀衣齊しく、雌去り雄來り各々泥を啄む。
雄巢を定むるときに雌を待ちて宿り、雌卵を生む日に雄を喚びて啼く。
新兒、雌哺みて雄相ひ助け、故國に雄歸るも雌迷はず。

雄子明年率雌後　雌雛何處逐雄棲　　雄子明年雌を率きて後、雌雛何れの處にか雄を逐ひて棲む。

とある。この詩は七言律詩で、「雌」、「雄」の字は八句のなかにかわるがわる用いられ、しかも第一句の「雌雄燕子皂衣齊」といったとおりに雌や雄はいずれも黒色で、各々八回出て來れば、全く雌か雄かを區別することができなく、讀者に判斷力を失なわせるようになる。この詩は面白半分に作られたものであろうと思われる。このように重字を用いた詩が多いが、紙幅の關係上、すべてを擧げることはできない。

(二)、韻の誤まり

これもつぎのような二つに分けて述べる。

① 落韻について。宋の胡仔の『苕溪漁隱叢話』に「裴虔餘云ふ、滿額の鵝黃の金縷衣、翠翹浮動して玉釵垂れ、教へに從ひて水濺ぎ羅襦濕り、是れ巫山の雨を行なふところより歸るを疑ふと。『廣韻』、『集韻』、『韻略』に、垂と歸とみな韻同じからず、この詩、落韻と爲る」といっている。古人は詩を作るときに落韻することをなるべくさけたが、たまに落韻することは免れえなかった。

さて、竹山詩には落韻したところが多い。たとえばつぎのように示す「祓川櫻花」の詩に、

白櫻翳神宇　隔岸落花多　　白櫻、神宇に翳り、岸を隔てて落花多し。

祝史驚寒杏　石梁衝雪過　　祝史、寒杏を驚かし、石梁、雪を衝きて過ぐ。

とある。この詩は五言絶句で、第一句は「平起不入韻」である。「多」は陌韻、「過」は箇韻、或は歌韻である。また、たとえば「詠史」三首の一の詩の場合がそれである。

殷公倒用司農印　暫解奉天危逼讎　　殷公、倒に司農の印を用い、暫く奉天危逼の讎を解く。

象笏安假朱亥手　一椎破碎老姦顏　　象笏安んぞ朱亥の手を假りんや、一椎して老姦の顏を破碎す。

右に擧げた詩は七言絶句で、第一句は「平起不入韻」である。「讎」は尤韻、「顏」は刪韻である。また、たとえば

つぎのように示す「十六夕御風樓宴集分韻雲字」の詩もそうである。

望前三日霽　望後更無會　　望前、三日霽れ、望後、更に會ふ無し。
盡極其勝人　皆鳴以文金　　盡く其の人に勝るを極め、皆鳴らすに文を以て金とす。
波接檻湧綠　樹向橋口分　　波、檻に接ぎて綠を湧き、樹、橋口に向ひて分つ。
詩罷幽情轉　哀箏隔壁聞　　詩罷りて幽情轉じ、哀箏、壁を隔てて聞く。

右に擧げた詩は五言律詩で、第一句は「平起不入韻」である。「會」は泰韻、「金」は侵韻、「分」、「聞」は文韻、或は問韻である。

② 重韻について。『詩人玉屑』は『孔毅夫雜誌』を引いてつぎのようにいっている。「退之の詩、狹韻、累句を押すを好みて以て工を示す。而るに重疊して韻を用ふるの病と爲るを知らざるなり。双鳥の詩に兩つの頭字を押し、杏花の詩に兩つの花字を押す。苕溪の漁隱曰く、皇甫湜の公安園池の詩を讀むに、また兩つの閑字を押す。日夜に閑なるを得ず、君子閑なるべからず。蓋し退之重疊して韻を用いるを好みて以て己の詩意を盡し、其の病と爲るを恤へざるなり」と。これは魏慶之と孔毅夫とは、唐の韓退之と皇甫湜との詩を作るときに重ねて韻を用いるを好んだ缺點を指摘した語である。全首詩の韻に同じ字を用いるのは竹山にもあり、たとえば「故園路得橋字」の詩がある。

十載羈愁今始消△　依然山路馬蹄橋△　　十載の羈愁、今始めて消へ、依然たる山路馬蹄橋、
柳邊認得分攜處　詩句依稀在板橋△　　柳邊に分携のところを認得し、詩句、依稀として板橋に在り。

右に擧げた詩は七言絶句で、第一句は「仄起入韻（蕭韻）」である。「橋」字を重ねて押韻したものである。また、つぎのように示す「扁鵲贊」の詩に、

桑君授神訣　能視垣一方△　　桑君、神訣を授け、能く垣の一方を視る。
施治如流水　隨物成圜方△　　施治すること流水の如く、物に隨ひて圜方を成す。

寤趣又起號　聲號布四方△　　趣を寤りまた號を起し、聲の號ぶこと四方に布く。
齊和八滅妙　萬世闡毉方△　　齊和八滅妙たり、萬世に毉方を闡く。

とある。この詩は五言古詩であり、全首に「方」一字の韻（陽韻）を用いただけである。全首において一字の韻で押韻したものとして、つぎに示す「至日酒樓小集得七陽」の詩がある。

尊酒將醉來復陽△　紅亭隔在濵川陽△　　尊酒もて將に醉はんとして復陽、來り、紅亭、隔てられて濵川の陽に在り。
自笑老身移几杖　心灰不動坐斜陽△　　自ら老身の几杖を移すを笑ひ、心灰し動かずして陽斜に坐す。

右に擧げた詩は七言絶句で、第一句は「仄起入韻」である。全首、「陽」一字の韻（陽韻）を用いただけである。

重韻については、中國詩史のうえにおいて、六朝時代から始まり、たとえば謝靈運の「述祖德詩」中に「段生蕃魏國，展季救魯人△。」「惠物辭所賞，勵志故絶人△。」（「段生は魏國に蕃たり、展季は魯人を救ふ。」「物を惠みて賞せらるるを辭し、志を勵まして故より人に絶る」）とあり、一首に二つの「人」字を押韻したものがある。また、陸士衡の「擬行行重行行」中に「此思亦何思，思君徽與音△。」「驚飈褰反信，歸雲難寄音△。」（「この思亦た何をか思ふ。君が徽と音とを思ふ。」「驚飈は信を反すを褰ち、歸雲には音を寄せ難し」）とあり、一首に二つの「音」字を押韻したものである。阮籍の「詠懷詩」中に「如何當路子，磬折忘所歸△。」「黄鵠遊四海，中路將安歸△。」（「如何ぞ當路の子、磬折して歸るところを忘る。」「黄鵠は四海に遊び、中路、將に安くにか歸らんとする」）とあり、一首に二つの「歸」字を押韻している。

唐の詩人たちも押韻するのに、よく重ねて用いた。杜甫の詩についていえば、重ねて押韻した詩作はいくつもある。たとえば「飲中八仙歌」中に「知章騎馬似乘船△」、「天子呼來不上船△」、「眼花落井水底眠△」、「長安市上酒家眠△」、「汝陽三斗始朝天△」、「擧觴白眼望青天△」、「皎如玉樹臨風前△」、「蘇晉長齋繡佛前△」、「脫帽露頂王公前△」（「知章が馬に騎るは船に乘るに似たり」、「天子、呼び來れども船に上らず」、「眼花さき井に落ちて水底に眠る」、「長安の市上酒家に眠る」、

「汝陽は三斗始めて天に朝す」、「觴を擧げ白眼青天を望む」、「皎として玉樹の風前に臨むが如し」、「蘇晉長齋す繡佛の前」、「帽を脱し頂を露はす王公の前」とある。この歌は三十二句あり、そのうちに、「船」、「眠」、「天」は二つ、「前」は三つである。杜詩のほか、韓退之の詩にもこのような類がかなり多く、たとえば「李花詩」に「花」字は二字、「双鳥詩」に「州」、「秋」、「休」字は各々二つ押韻されたものである。ほかの詩人もこのように重ねて押韻することが多かったが、ここにすべて擧げる紙幅がない。竹山詩の重韻は、おそらくこうした前人にまねたものであろう。しかし、全篇に一字だけの韻字を用いるというような例は、前人の詩中にその例を見ない。

二、模　擬

竹山は前人の詩のスタイルをまねることが好きであった。『詩經』や唐、宋、明の詩はみなそのまねる對象とされている。たとえばつぎのように示す「次白香山詩。云何處難忘酒，天涯話舊情。青雲俱不達，白髮遞相驚。二十年前別，三千里外行。此時無一盞，何以敍平生。韻倣其體。」（白香山の詩に次す。何れのところにか酒を忘れ難き。天涯に舊情を話す。青雲俱に達せず、白髮遞に相ひ驚く。二十年の前に別れ、三千里の外に行く。このときに一盞無くんば、何を以て平生を敍べんやと云ふ。韻、その體に倣ふ）の詩がある。

何處難忘酒　寒燈旅館情
肌依布衾薄　夢被塞鴻驚
瘴癘潮南去　雪霜幽北行
此時無一盞　爭奈百愁生

又

何處難忘酒　風塵落魄情

何れの處にか酒を忘れ難き。寒燈旅館の情なり。
肌、布衾に依りて薄く、夢、塞鴻に驚かる。
瘴癘の潮、南へ去り、雪霜の幽に北へ行く。
この時に一盞無くんば、爭奈か百愁生ぜんや。

何れの處にか酒を忘れ難き。風塵落魄の情なり。

回頭兄弟遠　傳信死喪驚　　頭を回らすに兄弟遠く、信を傳へて死喪に驚かる。
春夏秋冬淚　東西南北行　　春夏秋冬に淚し、東西南北へ行く。
此時無一盞　何耐鏡霜生　　この時に一盞無くんば、何耐か鏡霜生ぜんや。

右に擧げた詩は、白香山の「何處難忘酒」七首の一の韻字を用いたいわゆる「次韻」詩である。次韻とは、他人の詩と同じ韻字をその順序どおりに用いて詩を作ることである。次韻詩は宋以前現れたことが少なく、宋に入ると、詩人が詩で應酬したので、唱酬詩として盛んになり、詩人たちはこの仕方をよくとった。たとえば蘇東坡や黄山谷の詩集中に收錄されているこういう詩作はまことに多い。竹山のこの詩は、白詩の韻字（情、驚、行、生）を用いただけではなくて、しかも第一句の「何處難忘酒」及び第七句の「此時無一盞」の二句は、そのまま白香山の詩句を用いたものであり、黄山谷の有名な詩論である「換骨奪胎」の仕方を思わせる。

竹山のこの詩は、白詩から「換骨奪胎」されたものではないかと思われるが、かれが白詩の韻字をとってスタイルをまね、自身の落魄している狀態を述べるのは、生々しく人に感動させるものである。竹山は、古人の詩のスタイルをならうほか、また古人の詩と唱和することを好んだ。中國では、古人の詩にならうことについて、詩史のうえにおいて、その例が多いが、古人の詩と唱和する例は少ない。それは蘇東坡が始めたらしく、彼の「和陶詩」四卷は有名である。竹山にも「和東坡雪韻」と「夜雨和陸放翁」などの唱和詩がある。

陸放翁は南宋の有名な詩人であり、その『劍南詩稿』に現れた彼の生活は、遊びを好み、非常に放縱な詩人であり、（高木正一先生の御指教によれば、「放翁」の「放」は、そこから來ている。）山水を遊歷することによって作詩の靈感を得たようである。竹山の『奠陰集』を通讀すると、竹山もつねに山水を遊歷し、詩を作って唱和することに忙しかったことが分る。彼は、晩年になっても、やはりこのようであり、彼の「花月樓宴集分韻同賦得十三覃」の詩は、すなわちその證據である。この詩はつぎのようにいっている、「園池花月外，冬景亦堪耽。霜染周千樹，魚寒集一

潭。幽莊心自遠，吟興酒俱酣。醉臥君休笑，頽齡七十三」（池園花月の外、多景も亦た耽るに堪ふ。霜、周く千樹を染め、魚、寒く一潭に集まる。幽莊、心自ら遠く、吟興、酒俱に酣しむ。醉ひ臥すれば、君笑ふこと休めよ、頽齡七十三）と。この詩は、竹山の亡くなる三年前に作られた作品であり、詩を歌い、詩を作ることはかれの一生の仕事であったようである。彼は梅、菊や山、雨などの自然を好むだけではなくて、同時に琴や酒をも好んだものである。

また、彼は蘇東坡と同様に才氣走った詩人であった。蘇東坡は陶淵明の詩が有名であり、しかも風格が近く、親近感を抱いたので、一生懸命に陶詩と爭うことを考え、「和陶詩」四卷を作った。竹山も陸詩が有名であり、しかも風格が近く、親近感を抱いたので、その後をおいかけようと思っていた。それで彼は「酒學陶元亮，詩追陸放翁。」（癸未歲晚書堂小集與諸友走筆和坐間翁字韻）（「酒は陶元亮に學び、詩は陸放翁を追ふ。」癸未歲晚、書堂に小しく集まり、諸友と走筆して坐間の翁字の韻に和す）といっていた。力をつくして陸放翁の詩名を追いかけるために、彼は陸詩を十分に消化して「夜雨和陸放翁」の詩を作った。彼は陸放翁の「多夜聽雨戲作」の「遶檐點滴如琴筑，欹枕幽齋聽始奇。憶在錦城歌吹海，七年夜雨不曾知。」（檐を遶るの點滴、琴筑の如く、枕を欹けて幽齋に聽きて始めて奇なり。憶ひ、錦城の歌吹の海に在り、七年の夜雨曾て知らず）の詩をこわしてばらばらにして更めてつぎのような詩を作った。

夜來點滴枕重欹　琴筑遶檐依舊奇
十載幽齋雨聲外　滿城歌吹不曾知

夜來點滴して枕重ねて欹き、琴筑檐を遶りて舊に依って奇なり。
十載の幽齋、雨聲の外、城に滿つるの歌吹、曾って知らず。

北宋の王方直はかって同じ北宋の秦少游が蘇東坡の詩にまねすぎた缺點をつぎのように指摘している。「東坡、藏春塢の詩を作り、年、造物を甄陶の外に拋て、春、先生の杖屨の中に在る有り、而して少游、兪充哀の詞を作るに、乃ち云ふ、風、使者の旌旄の上に生じ、春、將軍の俎豆の中に在りと。余、以爲らく依仿すること太甚だし」（『詩人玉屑』卷八に『王方直詩話』を引く）と。

このようなまねることについていえば、竹山が古人の詩にまねることは「依仿すること太甚だし」の指摘もあり、作詩の才氣が有るのに、どうあっても古人の學問の入口にさ迷おうとしたのであろうか。竹山は大いに中國の古人の詩にまねたことによって、まことの作詩する才氣をかえって埋沒してしまったのではなかろうか。

さて、中國では、古人の詩に模擬する風潮について、宋代がもっとも盛んな時期であったといえよう。初期の宋詩三派についていえば、「西崑體」は唐の李商隱にならい、「白體」は白居易にならい、「晩唐體」は晩唐の詩人にならっていた。それは全く融通のきかない模擬のなかで摸索し、新しい創作の成果がなかった。蘇舜欽や梅堯臣などは「西崑體」に反對したが、自身の詩作もかって唐詩の束縛を脱出しえなかったのである。歐陽修、王安石や蘇東坡などは唐詩の情調の影響を受けることが深かった。黄山谷に至っては、力いっぱい杜甫にまね、さらに「換骨奪胎」や「點鐵成金」などの詩論を唱えた。明らかに古人に模擬しようとしたと思われる。南宋の末期になると、いわゆる「江西詩派」である詩人たちは、杜甫や黄山谷にならっても、「鵠を刻むも鶩に類す」というように何にも似つかぬようなものになったのである。ともかく、模擬することは、あまり良い詩法ではない。もっとも、たまにすれば、面白さや新鮮さがあるが、いつもそうであると、詩の價値を貶してしまうと思われる。

三、用　字

竹山詩において、前に擧げたような點が有るけれども、そのすぐれたところも無視することはできない。彼の詩作には非常に巧みな佳篇も少なくない。その佳篇の一字一句はほしいままに筆を下したことがないようである。ここにいくつかの例を擧げて置こう。

＊平安春望

青暗金城樹　香追紫陌塵　　青、金城の樹を暗くし、香、紫陌の塵を追ふ。

＊楠中將四百回忌辰
　代其裔孫幽閑翁作
雄圖籠日月　義烈動乾坤

雄圖、日月を籠し、義烈、乾坤を動かす。

＊中秋卽事
雲接三更斷　月過亭午明

雲、三更に接ぎて斷ち、月、亭午を過ぎて明し。

＊和玄通中秋宴脇
　阪大夫館韻却寄
美酒千鍾紅玉泛　新詩一幅彩雲搖

美酒千鍾もて紅玉泛び、新詩一幅もて彩雲を搖かす。

＊寄子祺
氣凌蓮岳十秋雪　背裂松洲萬里波

氣は蓮岳を凌ぎて十秋の雪、背は松洲を裂きて萬里の波。

右に擧げた詩句は、二つの巧みな對偶のなかに「動態」と「靜態」との動詞を用い、全體の畫面をして生々鮮明にし、ある立體感を生ませている。

＊中秋不見月得雲字
騷人挑燭坐　哀雁掩窗聞

騷人、燭を挑げて坐り、哀雁、窗を掩ふも聞ゆ。

＊喜子華至席上賦贈
春風隨塵動　夜雨繞床懸

春風、塵に隨ひて動き、夜雨、床を繞りて懸く。

＊中秋月食
已擲明珠歸老蚌　誰銷寶鏡作纖鉤

已に明珠を擲げて老蚌に歸し、誰か寶鏡を銷かして纖鉤を作る。

＊賦美人

攀花憐素艷　傍水試新粧　　花を攀じて素豔を憐み、水に傍ひて新粧を試む。

＊寄呈蛻巖先生

天護詞壇遺一老　身横學海導群川　　天、詞壇を護りて一老を遺し、身、學海に横たはりて群川を導く。

右に擧げた詩句は、動詞の二重對偶を用い、詩にいきいきとした勢いを強めている。

＊八月十五夜太融寺

賞月寄服仲立

今宵初皎潔　一別更淒涼　　今宵初めて皎潔なり、一たび別れて更に淒涼たり。

＊同賦荷淨納涼時得深字

迎風香更遠　含露色偏深　　風を迎へて香更に遠く、露を含みて色偏に深し。

＊二條護衞紀公假

館分韻得雲字

好賢頻授粲　忘拙漫論文　　賢を好みて頻に粲を授け、拙忘れて漫に文を論ず。

＊觀音臺遊望

觀音臺畔花若舞　觀音臺頭鳥如歌　　觀音臺の畔に花舞ふが若く觀音臺の頭に鳥歌ふが如し。

＊送玄通自洛歸龍野

離恨如山推不去　歸心似水逝難留　　離恨、山の如く推すも去らず、歸心、水に似て逝くこと留め難し。

右に擧げた詩句は、副詞の對偶を用い、詩の韻味や氛圍氣の濃度を深めたものである。

＊與伯遷箕山賞楓却寄蘭

皋此日蘭皋有約而不果

烟描千嶂紫△　霜釀半林丹△

＊擬送友人下第還鄉

白△帝雲間樹　黃△牛雨後灘

＊春郊用郊字

隴麥青黃△變△　林花紅△白交

＊擬寄道士

禾黍唯留玄△鶴餌　芰荷好供碧△霞裳

＊十日菊

勁葉未同紅△樹韻　清葩全奪紫△萸香

右に擧げた詩句は色の對偶を用い、山川景物に綺麗な色彩を染めさせ、萬物の生命力をいきいきと現している。

＊正誼宅送川習之之鯖江得平字

越雲山△漸聳　湖雪浪△將平

＊鬪雞

竦身氣△相摩　揮血目△具迷

＊依韻答君夷見寄

鳳城浪迹詩△千首　鴨水寒烟月△一鈎

＊登豐公故墓

千疇綠浪殷△墟麥　十里紅霞晉△代桃

烟、千嶂を描きて紫し、霜、半林を釀して丹くす。

白帝、雲間の樹、黃牛、雨後の灘。

隴麥、青黃變はり、林花、紅白交じはる。

禾黍は唯だ玄鶴の餌を留め、芰荷は好く碧霞の裳に供ふ。

勁葉、未だ紅樹の韻を同じくせず、清葩、全く紫萸の香を奪ふ。

越、雲あるときには山漸く聳へ、湖、雪ふるときには浪將に平かならんとす。

身を竦かして氣相ひ摩り、血を揮ひて目具に迷ふ。

鳳城の浪迹、詩千首、鴨水の寒烟、月一鈎。

千疇の綠浪は殷墟の麥、十里の紅霞は晉代の桃。

＊登天王寺浮圖

仙陵遺愛雲端樹　廢帝餘哀海上天　　仙陵の遺愛は雲端の樹、廢帝の餘哀は海上の天。

右に擧げた詩句は、字眼（五言詩では第三字を、七言詩では第五字を字眼とする）に實字（有形物を示す字、天、地、草、木のような名詞）を用い、物體の實在感を現わしたものである。

＊楠中將四百回忌辰
代其裔孫幽閑翁作

雄圖籠日月　義烈動乾坤　　雄圖、日月を籠し、義烈、乾坤を動かす。

＊登琵琶觀音閣

波濤涵萬象　天地豁雙眸　　波濤、萬象を涵し、天地、双眸を豁く。

＊十月朔綾部伊承邀飲舟
中同賦次片山孝秩韻

意氣論千古　賓朋會四方　　意氣、千古を論じ、賓朋、四方に會まる。

＊送或人之江都

勝遊三月指天涯　千里河山萬樹花　　勝遊の三月に天涯を指し、千里の河山に萬樹花さく。

＊傚明人早春作

何來淑景滿關中　帝宅山川氣象雄　　何れにか來る淑景關中に滿ち、帝宅山川の氣象、雄たり。

右に擧げた詩句は「壯語」である。竹山は「壯語」を用いることに巧みであり、詩の風骨をして傲立させ、雄健な氣勢を立てて、壯美の剛陽さを表している。中國古代の詩人では、たとえば、杜甫の「龍門閣」の「長風駕高浪，浩浩自太古。」（長風、高浪に駕す。浩浩として太古よりす）宗楚客の「遇雪應制」の「太液天爲水，蓬萊雪作山。」

（太液、天水を爲し、蓬萊、雪山を作す）などのようなものは「壯語」である。

竹山が詩を作るとき、字を用いることについて腐心したほか、疊字を非常に愛用した。これも彼の特色の一つである。たとえば、つぎのようなものがある。

＊洛之水

「彼洛之水　維石粼粼」　彼の洛の水、維れ石粼粼たり。

「彝甫言邁　我心悁悁」　彝甫言に邁き、我が心悁悁たり。

「洛水沔沔　于華是流」　洛水沔沔、華に于て是れ流る。

「榛莽斯拔　周行踧踧」　榛莽斯れ拔き、周行踧踧たり。

＊慶長

「對君翼翼　于從大師」　君に對すること翼翼、于、大師に從ふ。

「根山巍巍　杜邦所覩」　根山巍巍、杜邦の覩るところ。

「鏡水湯湯　員于海宇」　鏡水湯湯、海宇に員し。

「繩繩孫子　世謹侯度」　繩繩たる孫子、世々侯度に謹しむ。

「杜侯啓行　繹繹會同」　杜侯、行くを啓き、繹繹として會同す。

「用祈黃耇　屬屬洞洞」　用て黃耇を祈り、屬屬洞洞たり。

「萬舞洋洋　以衎嘉賓」　萬舞洋洋、以て嘉賓を衎しむ。

＊新荷

露助朝朝綠　風添夜夜香　露、朝朝の綠を助け、風、夜夜の香を添ふ。

＊答薮士厚見寄

寧樂能孜孜　平安又奕奕　　寧樂、能く孜孜、平安、又た奕奕たり。

＊畫虎行

猛氣凜凜凌翰墨　陰風颯颯襲衣裳　　猛氣、凜凜として翰墨を凌ぎ、陰風、颯颯として衣裳を襲ふ。

＊華燭引贈君夷

傳酒翩翩雙蛺蝶　對筵點點兩鴛鴦　　酒を傳ふる翩翩たる双蛺蝶、筵に對ふ點點たる兩鴛鴦。

右に擧げたような疊字を用いたものは、竹山詩において、古詩のなかにもっとも多く、律詩では少ない。前に述べた「洛之水」や「慶長」は、いずれも『詩經』のスタイルをまねたものである。それというのも『詩經』そのものが歌謠で、もともと疊字が多いからである。疊字はもとより詩人に愛用されているものであり、北宋の王安石の詩についていえば、疊字を用いるところがもっとも多いのは、五言律詩であり、しかも首句において用いるのが慣例であった。たとえば、「中書偶成」の「忽忽余年行，茫茫不自知。」（忽忽として余が年行き、茫茫として自ら知らず。）「遊棲霞庵」の「渺渺人間路，蕭蕭物外僧。」（渺渺たる人間の路、蕭蕭たる物外の僧。）「光宅」の「蕭蕭新犢臥，冉冉暮鴉翻」（蕭蕭として新犢臥し、冉冉として暮鴉翻ふ。）などである。竹山の疊字は、一首の中の第何句に用いられるかということについては規則性がなく、個人の好みによって用いる。

四、典故

竹山詩は句ごとに典故を引用しているので、群書を廣く讀まねば、眞にこれを理解することがむずかしい。これが一つの大きな理由で、研究するものが少ないのであろう。竹山は、日本の江戸後期に生まれたが、『奠陰集』の詩のなかで、故實を使っている作品が多く、わけても中國古代の事蹟を上手に使っており、その上、よく中國古代の人名を詩中に入れている。たとえば、つぎに示すようなものがある。

＊挽蘭洲五井先生

歌門驚子貢　坐足欠曾元　　歌門に子貢を驚かし、坐足に曾元欠く。
濂洛餘風殄　詩書舊澤存　　濂洛の餘風殄き、詩書の舊澤存す。
不方漸宋玉　漫爾賦招魂　　方に宋玉に漸じず、漫爾として招魂を賦す。

（第五句の「不方」については、底本の鉛印本『懷德堂遺書』に問題があるのではないかと思うが、さしあたり、このまま讀んでおく。）

＊墨梅歌

「山人有王冕　接武會稽陳憲章」　　山人に王冕有り、武に接ぐは、會稽の陳憲章。
「眞本摹本映高堂　何遜林逋對烏几」　　眞本も摹本も高堂に映じ、何遜、林逋、烏几に對す。

＊題雪中騎驢圖

看取雪中騎驢者　坡老曾稱孟襄陽　　雪中の驢に騎るものを看取するや、坡老、曾て孟襄陽と稱す。

＊依韻酬荒木伯遷見寄倣明體

彩筆入秋慚宋玉　黃花盡日傍陶潛　　彩筆、秋に入りて宋玉に慚じ、黃花、日を盡して陶潛に傍ふ。

＊癸未歲晚書堂小集與諸友走筆和坐問翁字韻

酒學陶元亮　詩追陸放翁　　酒は陶元亮に學び、詩は陸放翁を追ふ。

右に擧げた詩句中の「子貢」、「曾元」、「濂洛」（北宋の周敦頤、程頤、程顥をさす）、「宋玉」、「王冕」、「陳憲章」、「何遜」、「林逋」、「坡老」（蘇東坡）、「孟襄陽」（孟浩然）、「陶潛」、「陶元亮」（すなわち陶潛）、「陸放翁」などは、いずれも古人の名である。

中國の詩人では、古代の人名を詩に入れたものも多い。たとえば、唐の王績の「田家」の「草生元亮徑，花暗子雲居。」（草、元亮の徑に生じ、花、子雲の居を暗くす。）武元衡の「酬嚴司空見寄」の「劉琨坐嘯風清塞，謝朓裁詩月滿樓。」（劉琨、坐嘯するに風、塞を清くし、謝朓、詩を裁つに月、樓に滿つ。）杜甫の「石櫃閣」の「優游謝康樂，放浪陶彭澤」（優游す謝康樂、放浪す陶彭澤）などの詩である。それはすなわち宋の許顗がいった「凡そ詩を作るは、正に爾れ故實を塡むるが若く、これを點鬼簿と謂ふ。」である。このことばはもと許顗が黄山谷詩を批評するのに用いたものである。しかし、これを借りて竹山詩を批評しても、ふさわしいことばではないかと思われる。一途に故實を塡めても詩品の佳否を示すことはできないが、竹山の博學や中國の經史と宋明の理學とに精通していたことは否定できない。とくにその古詩のなかにしばしば多くの典故が引用されている。ここにその代表的な四首をとって、擧げてみよう。たとえば「洛之水」の詩に、

碩人候誰　　碩人、誰をか候たん。
維伋維軻　維頤維熹　　維れ伋維れ軻、維れ頤維れ熹。
維伋維軻　示我周行　　維れ伋維れ軻、我に周行を示す。
維頤維熹　嬬厥榛莽　　維れ頤維れ熹、厥の榛莽を嬬す。

とある。その「序」によれば、『詩經』の「雅」のスタイルをまねたという。その內容からみると、「雅」をまねただけではなくて、『詩經』の「國風」や「頌」をまねている。ともかく『詩經』のいろいろなスタイルをまねたものであり、またその神韻をよく得ている。「鄭風」に「揚之水」という題名がある。おそらくそれによって竹山はこの詩を「洛之水」と題したのであろう。「衞風」に「碩人」と題する詩がある。「碩人」とは、大德の人である。竹山詩に「碩人」を用いるのは、彼の知友である彝甫をほめたたえたものである。「周頌」の「我將」に「維羊維牛，維天其石」とあり、竹山はそのスタイルを用いて「維伋維軻」、「維頤維熹」といっている。「伋」は孔子の孫子思であ

り、「軻」は孟子の名である。「示我周行」とは、「小雅」の「鹿鳴」に「人之好我，示我周行」とあるところからきている。「周行」は大道であり、人の我を好むときには、我に大道を示すという。竹山が「維伋維軻」、「示我周行」というのは、子思や孟子は私に大道を示したことを意味する。「示我周行」は、そのまま引用されている。「頤」は北宋の學者程頤、「熹」は南宋の儒學者朱熹のことである。竹山は程朱學派の影響を受けることがもっとも深かった。だから、程頤や朱熹が私のためにやぶの障礙を拔き取ったと歌うのである。

『詩人玉屑』の「おおむね詩語、經史に出入すれば、自然にして力有り、然れども須らく是れ看る多く、做る多く、自家の機杼、風骨をして先に立てしめて、然後經史中の全語をして一體を作すを得しむるなり」というように、當時、竹山は大阪の大儒學者、いや日本の大儒學者ともいえる人であり、經史を飽讀し、『詩經』中の全語どれをも一語として自然にして力が有る使いかたで用いることができたと思われる。

また、つぎに示す「四皓贊」の詩がある。

海内炎威加　猛士已無多　　海内に炎威加はり、猛士已に多き無し。
唯有四老力　翼成難奈何　　唯だ四老の力有るのみ、翼成すること奈何ともし難し。
山中紫芝曲　堪和大風歌　　山中の紫芝曲、大風歌に和するに堪ふ。

「贊」とは、文體の一つ、人や物をほめたたえるものである。題が示すように、それは東園公、角里先生、綺里季、夏黄公の四人の老人、すなわち四皓が秦末の亂を避けて商山にかくれていた話である。竹山のこの詩は、スタイルとしては前漢の高祖の「大風歌」にならって作られたものである。「紫芝曲」とは、杜甫に「題李尊師松樹障子歌」という詩があり、「松下丈人巾屨同，偶坐似是商山翁。悵望聊歌紫芝曲，時危慘澹來悲風」（松下の丈人巾屨同じ、偶坐是れ商山の翁なるに似たり。悵望聊か歌ふ紫芝曲、時危くして慘澹悲風來る）と歌っている。蘇東坡に「和陶歸田園居」という詩があり、「坐倚朱藤杖，行歌紫芝曲。不逢商山君，見此野老足。」（坐するに朱藤杖に倚り、行く

に紫芝曲を歌ふ。商山の君に逢はざれば、この野老に見ゆれども足る）と歌っている。「大風歌」とは、前漢の高祖（劉邦）が故郷の沛縣に立ち寄り、村人を集めて酒宴を開いたときに、卽座に作ってみずから歌った有名な「大風起兮雲飛揚，威加海內兮歸故鄉，安得猛士兮守四方。」（『史記』「高祖本紀」）（大風起りて雲飛揚す。威海內に加はりて故郷に歸る。安くにか猛士を得て四方を守らしめん）という詩である。竹山が「紫芝曲」を「大風歌」に對句したのは、まことに巧みな對偶といえる。高祖がどのように猛士を得て天下四方を守らせるかと歌っても、猛士たちが商山で依然としてゆったりと自分の氣の向くままに仙藥である紫芝をとる紫芝の曲を歌い、ついに高祖はその猛士を得て守らせられないことになったという。

また、「題漁父下網圖」という詩がある。

漁舟依岸樹　下網有魚不　　漁舟、岸樹に依り、網を下すに魚有るや不や。
若得松江品　斗酒匪難求　　若し松江の品を得れば、斗酒、求め難きに匪ず。
我藉蘇公夢　將追赤壁遊　　我、蘇公の夢を藉り、將に赤壁の遊びを追はんとす。

この詩は、蘇東坡の「後赤壁賦」の典故をふまえている。同賦は「擧網得魚，巨口細鱗，狀如松江之鱸。」（網を擧げて魚を得たり、口巨く鱗細く、狀は松江の鱸の如し）といっている。「松江の鱸」とは、江蘇省にある川である吳松江に產するすずきに似た魚、美味で名高いものである。「蘇公」は、蘇東坡をさし、彼が湖北省黃岡縣城下にある赤壁に遊んで作った「前・後赤壁賦」は有名である。竹山のこの詩は、「畫に題する詩」であり、『奠陰集』のうちにこういうような詩が多く收錄されており、その當時の日本では、繪畫と作詩とが盛んに行われ、畫家と詩人とは互いに應酬のために忙しかったことが分る。竹山はこの詩を題するときに、みごとな「漁父下網圖」を見ると、ふっと奇想をおこして、若し漁父が「松江の鱸」という珍品をつり得れば、斗酒をも貰える。酒の威力で「蘇公の夢」を夢み、夢見るうちに蘇東坡について赤壁へ遊びに行けば、それはなんともいえない樂しい旅遊であろうという。この詩

を讀むと、その一幅の繪が美しい畫面であっただろうと感じさせる。こういうふうに典故に寓意を含めて、深入淺出の詩を歌うと、清新婉轉の感があり、竹山詩中の佳篇であるといえよう。

また、つぎに示すような「蘇東坡謫居畫像引」の詩がある。

東坡老人天挺豪
不須贅贊費呶呶
獨怪蒼天生偉人
空衝瘴霧老海濱
韓范富歐龍劍折
宋家宮殿魑魅窟
斯老孑然誰與居
補袞文章屬長物
畫師周山意匠工
水墨淋漓氣格雄
更怪從來好事者
袞容窮相喜模寫
不傳金馬玉堂儀
但覩黄冠野服姿
一榮一辱俱春夢
我對斯畫三嘆咨

東坡老人は天挺の豪、
贅を贅ねて費すこと呶呶たるを須いず。
獨り蒼天の偉人を生むを怪しみ、
空しく瘴霧を衝きて海濱に老ゆ。
韓范富歐の龍劍折り、
宋家の宮殿、魑魅の窟。
斯の老、孑然として誰とともにか居る。
袞を補ふの文章、長物に屬す。
畫師周山の意匠工み、
水墨淋漓にして氣格雄たり。
更に從來の好事者を怪しみ、
袞容窮相、模寫するを喜ぶ。
金馬玉堂の儀を傳へず、
但だ黄冠野服の姿を覩るのみ。
一榮一辱俱に春夢、
我、斯の畫に對して三たび嘆咨す。

斯畫謫中何事實　　斯の畫の謫中に何の事實かある。
負笠騎驢鞭在膝　　笠を負ひ驢に騎り鞭膝に在り。
我無記性懶窮搜　　我、記性無く窮搜するを懶(おこた)り。
不知黄州是儋州　　黄州か是れ儋州かを知らず。
失意翻有得意顔　　失意するも翻って得意の顔有り。
仰天一笑態度閑　　天を仰ぎ一笑して態度閑たり。
看取常州夢見語　　常州の夢見るの語を看取するや、
遺像千載照塵寰　　遺像千載、塵寰を照らす。

右に擧げた詩も「畫に題する詩」であり、そのスタイルは、「樂府」の「引」をとっている。この詩は蘇東坡の左遷された生活の繪を見せてくれる。だから、詩を題する竹山に「三嘆咨」という驚嘆を與えた。しかし、この十二聯、二十四句も有る長い詩を一幅の繪のなかに入れるのは、相當に大きい畫面がなければならないであろう。この詩によれば、その繪は畫家周山の傑作である。繪中に蘇東坡の「衰容窮相」という落魄のようすを描き、「金馬玉堂姿」という榮華富貴のようすが見えず、「黄冠野服姿」、「負笠騎驢鞭在膝」というような姿である。今、その繪を見ることができないけれども、その繪の影像は、この詩によって生々と再現されている。このことは蘇東坡が唐の王維の詩や繪に與えた評價のことばを思い出させる。魏慶之は「摩詰（王維の字）の詩を味ふや、詩中に畫有り、摩詰の畫を觀るや、畫中に詩有り」（『詩人玉屑』卷八に東坡の語を引く）といっている。このことばを改めて「竹山の詩を味ふや、詩中に畫有り、周山の畫を觀るや、畫中に詩有り」としても、ふさわしい評價であろう。蘇東坡は、詩詞や書畫が中外に名を知られただけではなく、さらにその落魄とした姿も畫家の筆下の良い素材であった。

「韓范富歐」とは、北宋の名臣である韓琦、范仲淹、富弼、歐陽修の並稱である。「照塵寰」とは、竹山が自注に

蘇東坡の年譜を引いて「先生、靖國元年、嶺を度りて北歸し、五月、病みて常州に止まり、朱行中に寄するの詩に、今に至り寶を貪らず、凛然として塵寰を照らすの句有り」といっている。竹山は、蘇東坡の「照塵寰」の詩句をとって蘇東坡の遺像を描寫しているのはふさわしい。

五、苦吟と佳篇と

『奠陰集』を通讀すると、竹山が漢詩文家として大成したのは苦心して研究するなかから得られたようであることが分る。彼は再三詩のなかにこのことに言及している。ここにつぎのようにいくつかの例を擧げて置こう。

＊八月十一日宿神光寺

吟哦未成睡　月色近中秋　　吟哦して未だ睡るを成さず、月色、中秋に近し。

＊君夷宅分韻得雙字

相遇消閑長夏夕　好費吟哦倒酒缸　　相ひ遇ひ閑を消すときは、長夏の夕、好んで吟哦に費して酒缸を倒す。

＊秋夜獨坐用孤字

閒夜難成睡　苦吟勞短鬚　　閒夜に睡るを成し難く、苦吟して短鬚を勞す。

＊與伯遷箕山賞楓却寄蘭皋此日蘭皋有約而不果

地勝吟偏苦　天曛興不闌　　地、勝るるも吟ずること偏に苦しみ、天、曛るるも興、闌きず。

＊夏日訪南坡谷川生席上分韻得窗字

不淺滄洲興　閑吟到夜釭　　淺からず滄洲の興、閑吟して夜釭に到る。

＊君夷宅分韻得人字

酒酣將促席　吟苦且欹巾　　酒、酣にして將に席を促へんとし、吟ずること苦しみて且つ巾を欹く。

右に擧げた詩句を見ると、竹山が詩を作るために苦勞したことを知る。吟哦して睡れないこと、吟哦するために酒を飲むこと、苦吟して短鬚に苦勞させること、風景にすぐれているのに詩を歌うのに苦しむこと、暇なときに夜中までも詩を歌うこと、酒で醉ったときにも苦吟することなどは、竹山の詩生活の實狀を占めていたのであろう。

中國でも、唐宋時代の詩人は誰もが苦吟した成果である。すなわち『詩人玉屑』に「陳去非嘗て余に謂ひて言ふ、唐人、みな苦思して詩を作り、いわゆる安の一箇字を吟ふや、數莖の鬢を撚斷す。句は夜の深きに向ひて得られ、心は天外より歸る。蟾蜍影のうちに淸らかに苦吟し、舴艋舟のなかに白髮生るるの類、是れなり」といったとおりである。唐の孟郊は、その代表的な詩人といえよう。宋の魏泰の『臨漢隱居詩話』は、孟郊の苦吟することを、つぎのように述べている。「孟郊の詩、蹇澁窮僻、琢削すること暇あらず、眞に苦吟して成り、その句法、格力を觀るや、見るべし。それ自ら夜に吟ひて曉にも休まず、苦吟して鬼神愁へ、如何ぞ自ら閑かにせざらんや、心と身と仇と爲る」と。これによれば、孟郊の苦吟することはすでに「心と身と仇と爲る」というような境地に落ち入り、身心のバランスを取ることもできない狀態になったのである。「詩人玉屑』の作者である魏慶之自身も苦吟した詩人であり、黃叔昇の「序」によれば、魏慶之は「種菊幽探計何早，想應苦吟被花惱。」（菊を種へ幽探するの計、何ぞ早き、想ふに應に苦吟するとき、花に惱まるべし）という詩句があった。宋の葉石林は同じ宋の詩人である陳后山の苦吟した狀態をつぎのように述べている。「世言ふ、陳無己（后山）登臨して句を得るごとに、卽ち急ぎて歸りて一榻に臥し、被を以て之を蒙る。これを吟榻と謂ふ。家の人、これを知りて、卽ち猫犬、みな逐ひ去り、嬰兒、稚子もまたみな抱持して隣家に寄す」（『石林詩話』）と。こういう不可思議な作詩の嗜好は、彼の作詩を專一にするところからきていて、まことに我々を感心させる。竹山は苦吟していたが、どのような狀態になったのかについて、以上に擧げた詩句のほ

か、文獻に明確な記錄はなく、後人によく知られない。しかし、彼の一生は作詩の一生でもあり、『奠陰集』に保存されている千四百餘首の詩は、陳后山詩の巧みさには及ばないが、その古詩についての知識の深さや典故の引用の豐富さをもって見れば、やはり相當の詩人であろうと思われる。彼は苦吟した成果によって、多くのすばらしい佳篇を提出した。その代表作として、つぎのようなものを擧げてみたい。

＊宮怨

清鸞搖夢響丁丁
錯謂君王向此經
不識綠陰多鬪雀
牡丹花上觸金鈴

清鸞夢を搖かして響くこと丁丁、
錯りて君王の此に向ひ經ると謂ふ。
識らず綠陰に鬪雀多く、
牡丹花上、金鈴に觸るるを。

＊安志（地名）塗中

陌上雞鳴曉色空
征衣露冷向西風
須臾出盡關明路
霜樹山村烟霧中

陌上に雞鳴きて曉色空しく、
征衣に露冷くして西風に向ふ。
須臾らく關明の路を出で盡せば、
霜樹、山村、烟霧の中。

＊賦春夜聞笛得聞字

長笛飛聲逐斷雲
梅花楊柳正紛紛
佳人乘月樓頭弄
孤客背燈館裏聞

長笛の飛聲、斷雲を逐ひ、
梅花、楊柳、正に紛紛たり。
佳人、月に乘じて樓頭に弄し、
孤客、燈に背きて館裏に聞く。

＊邊城詞

虜騎奔逃烽花閑　　虜騎、奔逃して烽火閑なり、
秋風吹老玉門關　　秋風吹き老ゆ玉門關。
沙場日暮黄塵起　　沙場日暮れて黄塵起り、
知是將軍射虎還　　知る是れ將軍の虎を射て還るを。

＊夜中獨起復題

蛟舞龍吟片月流　　蛟舞ひ龍吟(うた)ひ片月流る。
整衣殘夜獨回頭　　衣を整へて殘夜に獨り頭を回(めぐ)らす。
誰知滿目瀟然後　　誰か知る滿目の瀟然たる後、
人在琶湖百尺樓　　人、琶湖の百尺樓に在るを。

右に擧げた五首は、『奠陰集』に所收されている千四百餘首のほぼ半分を占める七言絶句のなかから抜き出したものである。竹山の律詩や絶句は、古典の衣裳を脱かれ、またごつごつした讀みにくい字句を用いることなく、清新で活々とした抒情的小詩は、長篇の古詩や三十韻、五十韻もある排律よりも、より親しみのもてるものである。

〔附記〕本稿について、木村英一先生（大阪大學名譽教授）、高木正一先生（立命館大學名譽教授）の御指導を得たことを記し、あわせて深甚の謝意を表し申しあげる。

一九八〇年七月於大阪